15-074　氷ノ山（ひょうのせん）021115

◎氷ノ山に来ている　まだ 2 時前だというのにうすぼんやりした空　晩秋を感じさせるひやりとした風　もうすぐ頂上だ　大段ヶ平（おおだんがなる）というところに車を停めた　見上げればすぐそこにてっぺんが見えた　ここは 10 年ぐらい前だったと思うが　友人に会いに来たついでに登った　元気だった　走って登った　走って下った

◎1 泊か 2 泊かと思案しつつ　天気予報がよくない　雨が降りそう　雨の山はつまらない　でもやってきた　今にも降りそうな雲行き　下のほう　ふもとの黄葉は素晴らしかったが　1500 メートル近づくと灰色と　針葉樹の緑

◎「ぶなのしずく」と書かれたところから　湧き水がたくさん出ている　すくって飲んだ　これは旨い　すなおな水のあじ　横川渓谷の激流　きれいな水　清冽な水　ブナが茂っている　大きなブナ　細いブナ　今はもう葉を落としている　無数の枝があっちこっちに伸びている　上のほうには天然の杉林　直木がスギになったとか　「千年スギ」と思ったら「千本スギ」　おお　ずっと向こうまでスギだ　ここのスギはずんぐりむっくり　風がきついのか

◎スキー場がいくつかある　営業は正月前ごろかな　雪が降り出スト壮観だろう　来てみたいねえ　雪の季節に

◎大山　かすかに向こうに　見える　回りはみんな山　大山の右のほうに日本海が見える　てっぺんはぐるり 360 度見渡せるはずなんだけど　山頂避難小屋が　デンと建っている　ここに避難するのもいいねえ　いつかきたいねえ

◎立派なブナ　葉を落とした立ち姿　太い幹　斑の柄　無数の枝が横に伸び　その先に　10 の何乗本の小枝　枝だけの木もいいねえ　空がまる見え　風が素通り　陽が入り込んで明るい　おぼろ太陽　明日の雨の準備かな

◎夜といっても　8 時　外に出る　星も月もない　向こうの山と空のあいだが明るい　山の向こうに何かがある　子供のころにそう思った　山の向こうのおぼろな明るさ　向こうには　世界がある　どこかのなにかがある

◎朝 7 時　よく寝た　よく飲んだ　何を考え何を思ったのか　わすれてしまった　覚えているのは　おぼろな向こうの明るさ　闇の中から向こうの世界が浮かび上がって見える　あそこは行ってはいけない世界　行きたい世界

◎黄色の世界　レモン色　ライトな黄色　みどるな黄色　でぃーぷな黄色　おれんじな黄色　少し赤　白い幹　黒い幹　緑の葉っぱ　振り向くと雲海　山々が重なり合って　そのあいだを雲海が浮かび上がって　流れている

◎霧なのか　霞なのか　上から見ると雲海なのか　このあたりの山々には　白い雲が　山と山のあいだに　上に下に白いふんわり　水墨画の世界　アジヤの風景　東南アジヤにはあるのだろうか　わからないね

久しぶりに下の道を走った　能勢のほうから　篠山を抜け　和田山のほうに走った
昔 M 君の工場がある　和田山へ何度も通った
今では有名な「竹田城」「雲海がいい」といわれているらしい　当時　だれも見向きもしなかった　いつもそばを通っていた
和田山は　今は　朝来市（あさご）となったらしい
養父という地名が出てきた　懐かしい
八鹿高校事件：高校教師と部落開放同盟が諍い多数のけが人が出た　人権という名を借りた　権力闘争かな
このあたり　ヒトも少ない　車も少ない

15-075　動物－Ｉ　071115

最近、生き物の話が面白く、その関係の本をよく読むようになった。「犬の話なら　まかして」「猫なら　わたしほど知っているヒトは　いないはず」とみなさん、井戸端会議の喧騒が目に浮かぶ。かくいうオカムラガハク、この言い回しは先日のとあるエッセイで、著者先生がご自分のことを<ＯＯハカセ>と可愛くおっしゃっていた、この方は本当の博士だと思うが「これはいただき」と以後オレも「オレと　自分のことをいうよりも“ガハク”のほうががいい　オレはいかにも　下品だ」ということでちょくちょく使用します。<画伯というのは画家、しかも巨匠のことだとだが、30 歳代からだれかれとなくあちこちでそう呼ばれていた。決して自分からそう呼ぶようにとか、いってほしいとか思ったことはない、そんなえらぶったことを選ぶオレでもあるまい。「理屈の多い奴　あれと話したらうるさい」なんて思われ呼ばれていたのかもしれないが、それぞれ関係がない、つながりのないいろんなところで、そう呼ばれることが多かった。けっして巨匠でもうるさいヒトでもないと本人は思っているが、まあ気楽にあだ名のひとつと思って、ガハクを自分から使用します。自分からこう呼ぶのは始めてだけれど、あだ名なら許されるかな>さて、オレなるオ・ガハクも「犬なら　犬のことなら」というくちなのです。とはいえでかい犬は怖いし、小さい犬はやかましいが「ええ　なんで　うちの犬が　ガハクの足元で　寝そべっているの」というように初めて行った家でお茶などご馳走になり話し込んでいると、その家に飼われている犬コロが、ガハクの足に顔を置いてねそべっているなんてことがよくある。ガハクは決して彼らにあまい言葉も優しいしぐさもしめさない、黙って目を見てそっぽむきそ知らぬふりをしている。これは犬コロが反対に「愛想しなければ」と努力しているのかもしれないが、とにかくそういうふうにすぐにガハクと犬コロは意気投合する、というのが自慢なのです、とはいえいつもそうなるとは限らないが。

鳥取環境大学の小林朋道先生著<人間動物行動学>も面白い。<はじめに>で“TKG コンテスト”がゼミの伝統行事になっている、これは“卵かけご飯の旨い食い方コンテスト”だそうだ。というようにヒトをくった話から始まり、ダニ・モモンガ・イモリ・ヤモリ・ツタ・ヤギと続いていく、いずれもその行動観察が学問的でないぶん、「面白い学問じゃないか」とおおいに感激、ひとつを紹介。「土壌動物」といえばどんな動物を思い浮かべますか。センチュウやクマムシ（こんな奴は知らなかったが、ネットを調べるとクマムシの専門家がいて、クマムシの強力キス（食らいつき）などとその行動を観察している学者発見）トビムシ（1ｍｍぐらいと聞きこれは見えないが見てみたい、いつも行く山の中にたくさんいそうだ）・ダニ（名前は有名だけれど、見えたことがない）・シロアリ・ハサミムシ・ムカデ・サンショウウオだとか。現在確認されている動植物は 150 万種類だそうだが、未確認を含めると 1000 万種類ぐらいがいるとい予想だそうだ。土壌動物の生態系における重要な役割は、一言でいえば、生態系における物質循環の要であり、具体的に言えば、地面に落ちた枯死物の分解である。枯死物は分解されることによって生物群に吸収される。枯死物の分解には二種類ある。「大きな有機物を小さな有機物に分解する」「小さな有機物を無機物にする」このあとの説明は化学記号がちりばめられ、ガハクにはチンプンカンプンでさらりととばすが、最後にわかりやすく書いてくれている部分を紹介。植物は小さな有機物でも吸収することができないが無機物はより小さいので根から吸収できる。土壌動物はおもに「大きな有機物を小さな有機物に分解する」そして「小さな有機物を無機物にする」のは土壌中の菌類（カビやキノコの仲間）や細菌類（大腸菌や乳酸菌の仲間）ガハクとしては、これはいいことを教えてもらった、そういうことだったのか、山の中の土や木を見る楽しみが増したと嬉々とするが、虫眼鏡のでかい奴を手に入れなくては見えないとも思う、実際に目で見たいものね。ここからが先生の真骨頂、「森の地面の一部をスコップ切り取って、ガラス容器にいれる」「枯れ葉、倒木、土が織りなす混沌としたジャングルの世界のような中で、ひそかに生きているさまざまな生物への好奇心、というかワクワク感、じーっと観察していると、こちらが驚くような行動を見せてくれる動物もいる」「体調 1ｍｍぐらいのトビムシが、ささ～」「トビムシが何かに触り何かを理解したように次の行動に移り」「私はもう、トビムシと友達になったような気持ち」「メダカの餌を入れてやるとトビムシはとても喜んで」「わたしの知り合いのトビムシと別のトビムシが・・」こうなるとおばはんの会話かなとガハクは笑ってしまう、犬や猫の自慢話、井戸端会議だ。「そうか　1ｍｍぐらいの生物観察はこういう方法があるのか」と感心しながら　ガハクもやってみたいと思うのであります。

15-076　動物－Ⅱ　081115

谷川健一著＜神・人間・動物＞この本を読んで「なるほど」とうなずくところがたくさんあった。生物・動物の話だけれど、前回の生物・動物そのものの話ではなく生物・動物が参加した民俗学の本です。神・人間・動物というけれど、ヒトはヒトの世界で右だ左だ、上だ下だ、前だ後だと賑々しく叫んでいるけれど、生きているのは、生存しているのはヒトだけではなく、ありとあらゆる生き物があちらやこちらで生きている、うごめいている。生物・動物たちは「ヒトはイヤだなあ」と思っているのか「関わりたくない」と思っているのか、こちらを見るともなく見ながら堂々と生きている、生存している。またその反対側に、ヒトが「ヒトより上だ　ヒトより下だ」と想像の世界、感性の世界、心の世界に存在する神や霊や精の存在、これはこれで本当にいる、おられる、間違いなくそこにおられる、というようなことを教えてくれる。昔のヒトがいっていた話、じいさんばあさんが拝んでいた神や石や動物や植物の話、というような懐かしい話だけれど、懐かしいで終わってしまっては惜しい、すごい感性が隠されている、すごい世界が見えてくる。

話はとぶが、毎日のように出向いている近所の安威川にいつもカラスがたくさんいる、カラスは中央市場の食料の残骸をねらってやってきているのか、その近所を塒にして常駐しているのか、カラスの生態が全くわからないガハクとしてはただ昼間はいつも何十羽かのカラスがいつもいると思っている。すぐそばのコンクリートブロックや、柱に止まってコチョコチョ動きながら警戒するような「絶対に逃げないぞ」と肝試しをしているような格好でとまっている。少し前までは「いやな奴」だと思っていたが、最近は彼らの目を見て「や～」と声をかける。現代のカラス、生ゴミ集荷日には防護網を払いのけ道に生ゴミを散乱させるという嫌われ者、屋根や電線にとまり鳴き叫ぶいやな鳥というイメージが定着しているが、童謡や物語にカラスをテーマにした話がいくつもあり、昔の人たちには好かれていた、愛でられていたのではないのかなと思う。すぐそばで、飛ぼうか、じっとしていようかと逡巡するカラスの目を見ると、憎いやつというよりも可愛いじゃないかというほうがガハクの思いは先行する。そのてんいつも話題にしているサギは近づけないし近づいてこない、警戒心が強い鳥で、身近には見られない、少しでも近づくと「ぎゃ～」と奇声を発して飛んでいってしまう。ただ何度も見ているが、釣り人のそばでたっている、魚が釣れると喜んでもらっている、釣り人のすぐそばで立ってまっている姿はおもしろくおかしい。

まえがき：ヨーロッパでは神・人間・動物の秩序が厳然と保たれている。人間が神の地位を侵すことができないと同様に、動物は人間を凌駕することができない。しかし日本では、人間が神として扱われるばあいがあり、動物もまた神としてあがめられることが少なくなかった。神・人間・動物の関係はヨーロッパやアメリカでは垂直的かつ不可逆であり、それに対して日本は、円環的かつ可逆的である。このような差異は一神教であるキリスト教の秩序理念とちがった自然観、世界観が日本人の意識をながく支配して、今日にいたっているからである。森羅万象に対する近親間というよりは親和力をもちつづけてきたわたしたちの先祖は、動物との婚姻の伝説や物語をかず多く伝えてきた。親和力は何よりも婚姻によってもっとも端的に表現される。人と獣の婚姻のほか、神と獣の婚姻もある。また人と神との婚姻がある。すなわち三者の関係はたがいに環をなしているのである。しかも神と人間と動物とは、本体を同じくするものが、ちがった現れ方をするばあいがしばしばである。三輪山の神は、夜は若い男の姿をしているが、昼は小さな蛇であった。また豊玉姫はお産のとき大きな鰐の姿を呈した。

人間はあくまで自然界の一員。

人間は神への衝動をもっている。一宗教に限らず、森羅万象に神を見出すアミニズムの中にも存在する。

人間は文明が進み、動物たちの畏怖を感じなくなったが、幾万年幾千年と人間の意識の底に培われた動物との共存の感覚、もしくは自然への共鳴は急速に失われつつある。これは自然の摂理というべき生命の均衡感覚が破壊されていることを意味している。

このあと、遠野物語に出てくる鹿・猪・猿・オオカミ・と続き、日本の他の地方の物語が綴られていく。

15-077　雑感　151115
昨夜から風が吹いている、小雨も降っている。ガハクの住まいのこのあたりは風を感じるときは少ない、今のように窓ガラスが「がたがた」ときおり「ピュー」というような風のうなりはめったに聞かれない。三十歳代に二・三年西宮市の海岸べりに住んだことがある。後にも先にも海の近くはあの時だけ、窓から海までがすぐで憧れの海風は入ってきたが、当時の日本、公害大国の真っただ中、暖かい季節には赤潮がいつも見られた。向こうのほうには大型船が行きかっていたが、埋め立てがどんどん進み、前に広がっていた海も今は運河のように狭くなっているそうだ。おそらくガハクが生まれる前ぐらいまでは西宮の浜、松並木と砂浜、夏には海水浴も可能、というような風景だったと思うが、排水・汚水が流れ込み「よくまあ　カニ君たち　生きているねえ」という感があった。感激したのは大晦日の 12 時、除夜の鐘ならぬ船の汽笛が一斉に鳴る、ボワボワボワと鳴り響いたのには驚き嬉しくなって窓を開けて目を凝らした。そこに住んで「風がある」と気づいた、毎日きつい風が吹く、しかも浜風と海風が交互に吹く、交互の境目の何分かが無風状態“凪”と習ったことがある。甲子園球場も近く、よく野球解説者が「浜風で　ホームランに　なった」とか「海風で　ホームランに　なりそこねた」といっている話を聞いて「おおげさな」と思っていたが、この浜風や海風は半端な微風ではなくきつい風だと実感した。洗濯物がひらめいてそれこそきつく挟んでいないと飛んでいきそうな勢いだった。
予断だが、洗濯物や旗や幟が「ひらめく」なのか「はためく」なのか普段使いの口語では「ひらめく」といっていたが、“閃く”に通じておかしいか、“旗”に通じてはためくが正しいかと迷い調べた。「洗濯物がひらめく」でいいようだ。
【１】「翻る」は、紙や布状のものが風を受けて、空中にある程度広がって位置を占め、動く意。主体が空中にある程度広がって見えている点に重点があり、動きにはさほど重点はない。
【２】「はためく」は、布や紙が風に吹かれてばたばたと音を立てていることにいう。
なお、古くは、炎が勢いよく燃えるとか、雷などが鳴り響くとか、鳥が羽ばたくといった意でも用いた。
【３】「ひらめく」は、布や紙が風に吹かれてひらひら動く意。「閃く」とも書く。
もうひとつ予断。「それはわかった」「これはわかりましたか」という場合の「わかる」という言葉を漢字変換すると「分かる」「解かる」「判かる」とでてくる。“分“は別けるにつながる、“解”ではなかなかかたい、“判”ではもうひとつなにかがありそう、なんて自分なりの解釈で「わかる」とひらがなを常用している。下記の先生もひらがなを推薦している。
斉藤由衣子＊＊　山内洋一郎＊＊＊（奈良教育大学大学院　国語学研究室)
要旨：教育とは、わかるためにするものであり、わかることは教育の最も重要な目標である。わかるように指導することが教師のなすべきことである。この教育基本語彙「わかる」について探く考えることは、教育に携わる人にとって重要なことである。「わかる」は「分く」から派生した。これは、－eru 型から Taru 型の派生であり、自動詞と他動詞の対立派生の結果である。派生当初は「分く一分割する」の意味として使用されていたが、次第に抽象的意味に偏っていき、理解する意の方向へと動いていった。現在、正書法では「分かる」と表記するが、「わかる」の意味と「分」とでは直接にはつながらない。「わかる」に漢字を宛てないことがよいであろう。

午前中の風がきつい時間、朝からの雨がやんだ。天気予報のピンポイントを見ると昼からまた降るらしい。「今のうちに走ろう」ととびだした。11 月も中旬になってくると風も冷たい。今の季節、ズボンは薄い生地のパンツを二枚重ね上もランニング用 T シャツの上に薄い生地の上着を二枚重ねて着ている。走りだして 10 分もするとジワリ汗が出もう少しいくと流れだす。この汗がいい、ゆっくりのペースだけれど「もうちょっと　スピードを　だして」といいつつもゆっくりはそう変わらない、年々スピードが落ちていく、距離は苦にならない。土手に囲まれた河川敷は風を感じない。今遊んでいるカモはシベリヤからの客人か、ずっと日本にとどまっている溜鳥さんか、ガハクには区別はつかないが見るヒトが見ればわかるのだろうね。カモにシラサギにハトにカラスと大型の鳥がたくさん舞っている。猛禽類は見たことがなが、いないのかいるのか、見損ねているのか、これまたどこかの先生に聞かなければわからない。生物の本を読むとこれらがやたら気になり楽しい。

15-078　雨　181115

「この日は　こっちの山　次のこの日は　あっちの山」と予定した日に限って雨が降るという天候が続いています。天気予報士の話によると、「一週間ぐらいの間隔で　高気圧と低気圧が　交互にやってきて　晴れの天気と　雨の天気が　これまた交互に　やってくるような　状態になっています」「なるほど　オレは　うまく　その交互をつかまえてへたをうっていたのか」と妙に納得するのでした。〈予断ですが、天気予報士の“士”の字がわからず、調べ下記に添付しますが、これを読むとまたまたわからない＞

◎11 月の第 1 週目には 3 泊で“氷ノ山”あたりをふらふらする予定でしたが、雨で早々に 1 泊できりあげ帰ってきました。氷ノ山は 10 年以上も前に友人の M 君の工場になにかの手伝いに行った帰り「ただ帰るのはもったいない」ということで氷ノ山に登った。氷ノ山の山情報は知らなかったが、「昼過ぎにどこかに着き　そのまま登山　頂上から U ターン　夕方暗くなるまでには　車に帰れるかな」と登った。その時のスキー場の駐車場、多少積もっていた雪、神戸大学の小屋、頂上の避難小屋を思い出し「来たことがある　懐かしい景色、その時も扉を開いて中を見た小屋」と歩きながら昔の思い出、だけど夕方から予報どおり雨模様、夜には本格的に降り出し朝飯を食って早々に退散した。

◎第 2 週目は今季最後の北八ヶ岳 2 泊 3 日、これも雨で中止。麦草峠で車を止め白駒池の青苔荘でテントを張り、前回同様“にゅう・縞枯山・雨池”あたりを散策したかった。何故最後かというと、麦草峠を通る国道は 11 月中旬以降から春までの間は雪のため通行止めになる。

◎第 3 週の今回は、澤山グループ残党 5 人で朽木方面の河原で“焚き火”テント泊をしようと決めていたが、雨で中止。雨でというのはちょっと違うかもしれないというのは、決行の 1 週間前に「虫垂炎らしい　いけない」3 日前に「風邪をひいた　あやぶい」前日に「風邪だ　薬を飲んでいるが」というようなことが相次ぎ「雨模様だし　やめる」と最後の方、「オレ　ひとりでいくわけにもいかないし　雨も　いやだし」ということで中止を決めた。

最近はこんなふうに雨で中止が多い。雨の日を狙って予定しているようでその前後は晴れているというような天候、どなたかが「わたしが雨人間かな」とおっしゃっていたが、ひょっとするとこれはオレ自身かもしれない。この澤山グループですが、50 歳代の頃は毎年秋の恒例のように鈴鹿や大嶺の河原で焚き火テント泊をしていました。当時は皆さん元気そのもの、東京からもひとりふたり集まり、山の奥の河原に 3、4 張りのテント、旨い飯を酒を持ちより飲み歌い踊れと騒いだものです。ひとっこひとりいない山の中、暗闇に赤い炎が燃え上がり幻想的な時間が過ぎました。もう何年も焚き火山行をやっていなかったが、「澤山さんの供養に」と誘いかけると、ひとりふたりと最終的に 5 人が集まったのですが、他の方々と同様に 5 人も歳には勝てないのか「もうあの人は　病気がちで　無理」「あの方はとてもテント泊は無理」信州のアルプスを我が物顔で登っていた猛者連も好々爺になったということでしょうか。

士　①男子。特に，学問・道徳を修めた男子についていう。「同好の－」「好学の－」「高潔の－」
　　②さむらい。武士。
　　③古代中国で，大夫と庶民との間に位した身分。
大辞林 第三版

師　①学問や芸能などを教える人。先生。師匠。「－と仰ぐ」「－の恩」
　　②僧侶・神父など宗教上の指導者。
　　③中国，周代の軍制で，2500 人を一師という。転じて，軍隊，戦争。
　（ 接尾 ）
　　①　技術・技芸などを表す語に付けて，その道の専門家であることを表す。　「医－」　「講談－」
　　②僧侶・神父などの姓氏に付けて，尊敬の意を表す。
大辞林 第三版

15-079　廃村八丁　201115

「登山口　まだか」でこぼこ道を車で進み、ちょうどいいところで止めた。空が暗く曇り今にも降りそうな天候だ。川を渡り「廃村八丁」と書かれた矢印を登り始めた。この山はこれで三回目、一回目は菅原から登ったが、前回と今回は小塩から登った。長靴を履いてきた、先日に芦生の河原を歩いたとき「これなら登山靴よりいい」と発見、「廃村八丁のように、小川がいくつもある山には　うってつけ　しかも　少々の　上り下りなら　苦にならない」と利点ばかりである、しかも安い、たかだか 1000 円である。標高 700 メートルぐらいの低い山並みに囲まれた谷とはいえ少しばかりの平らなところがある、その平地に石を積み敷地を作って家を建て暮らしていたようだが、今はその石垣が残るばかりで、廃屋はもちろん廃材や残骸もほとんど残っていない。まだだれかがお参りするのか、十基ほどある墓は草が刈られてひっそりとたたずんでいる。村の入口には苔むした石の下に地蔵さんが祭られている、コップに入った水がそえられている、赤い前垂れがかけられている。その地蔵さんの顔はメロンぐらいの大きさの丸い石ころ、のっぺらぼうの石、むかしは目鼻がついていたのかいなかったのかわからないが、まるこい石ころだ。谷筋なので川はいくつも流れている、ということは当然だけれど湿度は相当高そう。とはいえどこの山に登っても、帰ってリュック開けると中身が全て湿気ている、山の中で晴れていても山から帰ってリュックを開けるとシラフもテントも服もカメラも湿気ている、アトリエいっぱいにそれらを広げ一日陽に当てると、カラリとフワリといろいろの物が平常をとり戻す。山の中はいつも湿気ている、なんでもかんでも湿気ている、じっとりしっとり湿っているのだろうと実感する。毎週二日三日と雨が降る今日この頃、川の水はいつもよりは多いが、思ったほどには増えてはいない。歩いていて崖のところで、土がえぐられ土砂が崩れているようなところがある、大量の雨が降り、鉄砲水やら激流やらで削られた跡だと思うが、それこそ大量の雨が短時間に降った後のできごとだったのだろう、そういえば京都で被害のでた台風があった、つい最近のことだったと思い出す。その台風から 1 年 2 年ぐらい後、京都や滋賀や福井の山に入ると、通行止めや崖崩れの工事やら橋がなくなっているやらたくさんの被害を見たが、和歌山の大被害に比べると規模が小さい。

川の中、底まで 30 センチはないだろうと安心し、長靴のまま少し深そうなところもバシャバシャ、これはいい、登山靴なら水から出ている乾いた岩を「滑りませんように」とおそるおそる踏んでいく、飛んでいく、踏み外せば、「おっとっと　バシャリ」で靴の中に水が入る。長靴でも底が石のところはソロリと足を置き、滑らないことを確かめまたソロリと歩く。11 月の半ば低い山とはいえ木々の葉はほとんどない、黄色い葉がかろうじて枝にからみついている。大木もか細い木も葉を落とし空に向かって小枝が伸びている。これから若葉の季節まで空が見える、尾根道に上がれば前後左右が見える、幹や小枝に雪がへばりついてますますきれいに壮絶になる、そういう景色が好きだ。土の上に落ちて積もった枯れ葉、褐色の枯れ葉の上のまばらに、イエロー、オレンジ、レッドがちらちらする、風が吹くとそれらの色が舞い散る。間もなくすると、これにホワイトが加わり、そのあとはホワイトだけになる。

二百年、三百年前には村人がいた、こんな山奥で何十人もの人たちが暮らしていた、ここのそんな時代を覗ける近代機器メガネでもあればぜひとも覗いてみたい、老若男女のさまざまに会ってみたい、さぞかし嫌がられるだろうが。山を歩くと 5 メートルぐらいの穴ぼこがいたるところにある、炭を焼いていた窯の跡だとすぐにわかる。50 年前までは日本の家庭用燃料のほとんどが炭かその類、プロパンガスが出てくるまではずっとそうだった。かくいうガハクも十歳ぐらいまでは、カンテキ・へっついさん・七輪などが家にあることが普通で「ちょっとお客さんが来られた　お湯を沸かして」なんて頼まれ、七輪の中に新聞紙を丸め、その上に細くわった木を並べてマッチで火をつける。少し燃え上がるとその上に少し太い木を乗せヤカンをかけた。カラケシ、石炭、コークスというような奴も覚えている。五右衛門風呂は石炭で沸かしていたが、石炭に火をつけるのはもっと難しかった。当ブログで前回の焚き火の項、山の中で湿った河原の木に火をつけるのも難しかった。大学山岳部出身の猛者はそれらの河原から引きずってきた枝や幹で上手に火をおこしていた。ガハクの子供時代は、火消し壷に入ったカラケシ、用意された細木、買った薪、乾いた石炭だった。炭は山の住人の必需品でしかも現金収入のひとつ、薪や炭俵を担ぎ峠をいくつも越え向こうの街まで歩いていった、帰りは米や服を背負って帰ってきた、そんな人たちの姿が目に浮かぶ。地下足袋、わらじというような貧相な足元、足も足の裏も丈夫でないといけないねえ。どんな人たちかねえ。そんな山を登らせてもらった。

15-080　シジフォス　231115

　福岡伸一著<やわらかな生命>この本は生物学者の先生のエッセイ集、原稿用紙数枚程度の文章がたくさん載せられている。「おしゃれな文章　いいことを　おっしゃる」と扉に載った顔写真を見て「この先生　TV によく出るおかた」おとこまえはなんともいえないが　話も格好も　お洒落である」その中のひとつ<シジフォスの労働>を紹介しょうと思いますが、そのまえに「シジフォス　とは　なんだった　かな」と調べてみた。

◎シジフォス：ギリシャ神話の中にでてくる話。コリント王ゼウスの怒りをかい、死神を送られたが，死神をだまし捕らえたため，しばらく死ぬ者が絶えたという。重なる悪業の罰として，地獄でたえず転がり落ちる大石を山頂へ押し上げる「永遠の空しい苦業」を課せられた。：若い頃はこれらに感動したかもしれないが、人生はこんなもの、これでいいのではと思うこのごろである。

◎フランスの哲学者アルベール・カミュ：「不条理」実存主義的な用語として、人生に意義を見出す望みがないことをいい、限界状況的、絶望的状況を指す：<シジフォスの神話>シジフォスは神から刑罰を与えられる。巨岩を山頂まで担ぎ上げる。すると岩はふもとまで転げ落ちる。シジフォスはまた担ぎ上げる。岩はまた落ちる。シジフォスは死ぬことができず、永遠にこの作業を繰り返す。「若い頃はこれらに感動したかもしれないが　人生はこんなもの　生きているあいだはなにかを担ぎ上げる　ずっと担ぎ上げる　これでいいのではと思う　このごろである」

福岡先生：すべてのことが不透明で、不確かなこの世界にあって、次の二つのことだけはいつの世でも真実である。第一に、人の心は変わるということ。第二は人は必ず死ぬということ。私たちはふだん自分は自分、自分のからだは自分のものと思っている。けれどほんとうは、私が私であることを担保する物質的基盤は何もない。私の身体は流れの中にある。分解と合成のさなかにある、常に新しい原子や分子が食物として取り入れられ、その時点で私を構成している原子や分子は棄てられる。身体の中でもっとも高速に入れ替わっているのは、外界との最前線にある上皮細胞で、消化管の上皮細胞は二日ほどで更新される。だからウンチの主成分は、食べかすではなく、自分自身の分解産物である。脳細胞ですら例外ではない。脳細胞自体や連結部（シナプス）を構成するたんぱく質、細胞膜の脂質、DNA,すべてが分解されつつ、合成される。ゆえに記憶も実は流れ流されている。全身のあらゆる部位が常につくりかえられている。一年もすれば、物質的には私は別人になっている。だから心がどこかに宿っているにせよ、それは変わって当然なのだ。むしろ常に変転し続けている。約束なんていうものは生物学的にはやぶってよい。だってそれは過去の別人がしたことだから。自己同一性も自己実現も幻想である。生物はわざわざエネルギーを使って積極的に自らを壊しては、つくりかえている。たんぱく質の合成経路は一通しかないけれど、分解経路は何通りもある、という事実がわかった。細胞は壊すことの方を必死にやっている、できたてほやほやのたんぱく質ですら情け容赦なく分解している。これが動的平衡である。これが、第二の疑問、なぜ人は死ぬのか、を考えることにつながる。秩序は無秩序の方へ、形あるものは崩れる方へ動く。構造物は風化し、輝けるものは錆び、熱あるものは冷める。エントロピー（乱雑さ）増大の法則である。時間の矢はエントロピーが増大する方向にしか進まない。生命現象はこの世界にあって、もっとも秩序あるしくみだ。エントロピー増大の法則は、生命の上に、細胞のひとつひとつに情け容赦なく降り注ぎ、たんぱく質を変性させ、細胞膜を酸化し、DNA を傷つけようとする。少しでもその法則に抗うために、生命はあえて自らを壊すことを選んだ。率先して分解することで、変性、酸化、損傷を、つまり増大するエントロピーを必死に汲み出そうとしているのだ。下るべき坂道をできるだけ登り返そうとしているのだ。あたかもシジフォスの巨石運びのように。しかし強大な宇宙の大原則のもとではその努力も徐々に損なわれていく、排出しきれない乱雑さが少しずつ細胞内に溜まっていく。やがてエントロピー増大の法則は、動的平衡のいとなみを凌駕する。それが固体の死である。

「難しい　わからない　どうなっている」と思いつつも、生物学的存在も、“もの”の存在も、消え、無くなり、存在しなくなっていく。◎ガハクいわく「形あるものは　無になる　無くなってしまう　これがあたりまえじゃ」
身体の中の細胞がどんどん生まれ変わって、「昨日の　私は　明日の　私じゃ　ない」とはこれは名言、これこそ人生賛歌と、ほくそ笑むのです。「エントロピー増大の法則　これは　なかなかに　ちんぷんかんぷん」

15-081　えかき生活　291115

昨夜「寒い　冬とは寒いものだ　こんなに寒いのか」と思いながら、このつぶやきにふきだした。半年前も、一年前も同じようなことをいっている、暑さと寒さの違いがあるが、夏の暑さ冬の寒さが始まるころの最初に日に「こたえる　身体にこたえる」といっているのがおかしい。「この暑さ寒さも　たかだか　一週間の辛抱　それ以降は　身体が慣れていく」とこれまた同じことをいっている。冬の寒さは始まるころに、もっと寒い信州に行き、登山口で車を降りたときが一番寒かった。「くそお　なんでこんなにさむい」とがちがち震えながら服を着替え、登山靴を履き、10 分も歩くとほくほくしてくる。上着を一枚脱ぎ 1 時間のワンピッチを登ると汗が流れた。大阪より信州が、登山口より上のほうが、どんどん気温は下がるが、汗と熱気でふうふういいながら雪の上でテントを張って寝る、もうその頃には寒さなど吹っ飛び、これが平常と身体がなじんでいる。山から下りて「暖かいね」と車を走らせ「大阪は暑いねえ」ということになる。人間の体感とはいいかげんなもので、暑い寒いと感じながらも、もっと暑い寒いを体感すると「こんなものは　どうってことが　ないじゃないか」ということらしい。先日、温度・湿度が出る目覚まし時計を買った。それまで暖かいとか湿気るとか口ではいっていたが、温度・湿度の数字を見ると「え　こんなものだったのか」と驚ろいている。まず湿度「漆をさわる人は　80%の湿度が必要らしい」「雨が続いて湿気ている」「晴れが続いて乾燥ぎみ」といってはいたが、日本の普通の湿度は 40～60%ぐらいと再認識。2,3 日はれても 40%ぐらい、しとしと降っていても 60%ぐらいなのだ。気温も、「アトリエは寒いのだ」といってもまだ 15 度はある。今その時計を見ると夜の 12 時前には 15 度・50%で、朝 7 時には 10 度・60%であった。

3 月末には、恒例：新大阪駅付近での個展＜シェスタ倶楽部＞が決まっている。3/21～3/26 の期日、例年通り最終日前日の金曜日に 1000 円パーティを予定している。12 月に 400 部を同封してくれるところがあるので、いつもそれに便乗させてもらっている、早々と案内状は刷り上っている、その場所に送る手配も終わっている。9 月に茨木市のギャラリーで展覧会をした。「え　これだけ」という方がいたが、9 月の展覧会は「見せるだけ、見てもらうだけ」ということで、大きい作品を中心に「がんばっていますぞ」と胸を晴れるいくつかを出品した。2 週間の会期中半分ぐらいは出勤した。「売れない　金にならない」ということでは、展覧会が終わって一ヶ月二ヶ月経ち、「金がねえ」とこたえるが、「ま　こういう　金がねえ生活も　いいじゃねえか」と苦虫ではないが、淡々としているふうに装っている。「見せるだけ、見てもらうだけ」というこの展覧会、是非とも度々したい、気持ちがいい。3 月のシェスタ倶楽部展覧会は、皆さんに来ていただき、コーヒーを飲んでいただき、お話をして、「買ってやろうか」「買ってやるぞ」という方もたまにはあらわれ、展覧会の経費を払ってまだ少々はおつりが出るというありがたさである。

絵を描きながら「白いキャンバスに　ひと筆　ふた筆　いくつかの色を　入れたときが　一番　輝いている」と常々思っているし、若い頃には先輩たちからもよくそういわれた。おとしどころ、筆のおさめどころがわからなかった、「まだまだこれから」「これで終わってはいけない　もっともっと　描き込まなくては」とどんどん画面が汚れていった。どうにもこうにもならない、汚れてしまった状態のときに「ええい　もう一度　白を塗って　画面全部に白を塗って　そこから　もう一度　描き直そう」という方法を何度か試みたが、残念ながら最初の白いキャンバスの感覚は戻ってこない、筆がみょうに引っかかってしまう、色の乗りがおもしろくない、最初の感覚がなかなか戻らない、いったん白いキャンバスに絵をかいてしまった後では「それこそ後の祭り　どうしようもないねえ」と解決方法を悩んでいた。2.3 日前から、ナイフを使って絵の具を刷り込んでみれば、ということを試し始めた。アトリエに絵を習いにきておられる方が「油にあこがれていた、是非にも油絵を描きたいと思っていた　油でいきます」と描いておられる方がいる。わがアトリエも時代の流れ相応に、水彩・アクリルの方々が増え、油画を描く方は一人二人になってきた、「ここの解決方法は」なんて教えながら、自分なりに過去の技法が次々に思い浮かぶ、ナイフで絵の具を乗せ、ナイフでこすって、またまたナイフで描く「おおお　懐かしい技法」と思いながらその方の絵も少しずつ重厚になっていく「いいじゃないですか」といいつつ「ちょっとまてよ　これ　オレにもつかえないのか」と試み始めた。まだ 1.2 回の試みだけれど、何年も悩んでいたことが、簡単に解決するかもしれない。しかも、キャンバスの白い部分が残っていたときは「爽やかなんだけど　物足りない」というジレンマも解決できるかも、じじいになっても勉強だ。